蔦屋重三郎と江戸メディア史

浮世絵師、ベストセラー作家、瓦版屋の仕掛け人

渡邊大門

NHK大河ドラマの主人公

歌麿、写楽、北斎を世に送り出した謎多き「蔦重（つたじゅう）」の生涯と、花開いた江戸の出版文化をひもとく。

浮世絵も娯楽本も大当たり!

蔦屋重三郎と江戸メディア史

浮世絵師、ベストセラー作家、瓦版屋の仕掛け人

渡邊大門

星海社

308

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

江戸時代（慶長八年／一六〇三～慶応四年／一八六八）は、まさしく文化の花開いた時代だった。むろん、織豊期以前にも豊かな文化が育まれ、公家や武家、庶民に至るまで享受したのは事実であるが、さまざまな面で相違が見られる。

たとえば、織豊期以前の書物は原本をもとにして手書きで書写され、人々の間で読まれた。むろん、庶民まで流通することはなく、公家や武家らの一部の身分の者しか閲覧が叶わなかった。絵画も同様であり、庶民が気軽に水墨画や襖絵を鑑賞できたわけではない。教育も同じであり、寺子屋などの発達によって、庶民に対する教育の機会が増えたのは江戸時代からである。

江戸時代になると、書物や絵画は専門の書籍商などにより売買され、人々の間に流通していった。その立役者の一人が蔦屋重三郎（寛延三年／一七五〇～寛政九年／一七九七）である。彼なくして、江戸文化を語ることはできない。

そもそも重三郎は、安永二年（一七七三）に吉原大門口（東京都台東区千束）で細見屋を開業していた。細見とは遊郭の案内書のことであり、当時、吉原は日本最大級の遊郭として知られていた。天明三年（一七八三）九月、重三郎は通油町（東京都中央区日本橋大伝馬町）に店を構え、地本問屋となった。地本とは、江戸で出版された大衆的な書籍のことで、洒落本・草双紙・読本・滑稽本・人情本・咄本・狂歌本などの種類があった。

重三郎は企画力に優れ、大田南畝、山東京伝、曲亭馬琴といった著名な作家とも交流があった。やがて書籍だけでなく、浮世絵版画の出版にも力を入れ、喜多川歌麿、葛飾北斎、東洲斎写楽らの作品を世に出した。こうして重三郎は、江戸で一、二を争うような地本問屋になったのである。

しかし、重三郎の生涯に関しては、関係する史料が実に乏しく、その生涯を細部にわたるまで明らかにするのは困難である。本書ではできるだけ重三郎の生涯に触れるとともに、交流のあった作家や浮世絵師、そして江戸文化を詳しく取り上げる。重三郎の生涯を通して、江戸の出版文化をご理解いただけると幸いである。

目次

はじめに 3

第一章 蔦屋重三郎と吉原 13

蔦屋重三郎の生きた時代 14
江戸っ子気質 17
重三郎の関係史料 19
石川雅望と大田南畝 20
重三郎の生涯 23
遊郭の源流 24

発展した傾城屋 26
三大遊郭の誕生 28
地方に波及した遊郭 30
吉原細見とは 33
版元になった重三郎 34
版元としての処女作 37
版元になった裏事情 39
出版点数を伸ばす 41
凋落した鱗形屋 43
復活した蔦屋 45

コラム❶ 吉原と遊女のことなど 47

遊女と遊ぶ相場 47
遊女との遊び方 49
遊女になった女性たち 51

遊女の一日 53

第二章 狂歌本への進出 57

日本橋通油町への進出 58
富本節、往来物の刊行 59
富本節と吉原 61
出版界の再編 62
狂歌の時代 65
天明狂歌壇の顔ぶれ 67
狂歌熱の広がり 69
狂歌壇での対立 71
狂歌界への参入 73
大ヒットした狂歌書 75

狂歌絵本の成功 78

第三章 黄表紙と出版統制 81

黄表紙の時代 82
重三郎のさまざまな支援 83
三作品の内容 86
暗い世相のはじまり 89
政治を風刺した作品 92
『文武二道万石通』の世界 93
発禁となった『悦贔屓蝦夷押領』 95
寛政の改革の骨子 97
出版への統制 99
幕府による弾圧 102

摘発された『天下一面鏡梅鉢』と『黒白水鏡』 104
山東京伝の登場 107
断筆を考えた京伝 109
京伝の三部作 111
重三郎と京伝の処罰 114
それぞれの事情 116

コラム❷　発禁処分となった書物 119

天明・寛政年間に発禁処分となった書物 119
林子平とは 121
『三国通覧図説』と『海国兵談』 122

第四章 喜多川歌麿と浮世絵 125

浮世絵の発達 126
菱川師宣と鈴木春信 127
重三郎が交流した絵師 129
勝川春章とは 131
北尾政美とは 133
喜多川歌麿と重三郎 135
歌麿の狂歌絵本 138
美人画の時代と鳥居清長 140
歌麿の美人画 143
歌麿の最高傑作 145
冷えていった二人の関係 147
歌川豊国の登場 149

重三郎の対抗策 152

第五章 東洲斎写楽の登場 155

歌舞伎のはじまり 156
成熟していった歌舞伎 157
東洲斎写楽とは何者か 160
研究の進展 162
写楽の作風の変遷 164
二十八作もの作品 167
江戸市中に広まった評判 169
崩壊した写楽の画風 170

第六章 重三郎の最期 173

苦しかった経営 174
滝沢馬琴とは 175
馬琴と京伝・重三郎との出会い 177
十返舎一九と重三郎 180
京伝と歌麿 182
重三郎の最期 185

主要参考文献 186

おわりに 188

第

一

章

蔦屋重三郎と吉原

蔦屋重三郎の生きた時代

蔦屋重三郎が生きた寛延三年（一七五〇）から寛政九年（一七九七）の期間は、どういう時代だったのだろうか。まず、時代背景について書いておこう。

徳川吉宗（貞享元年／一六八四～寛延四年／一七五一）が江戸幕府八代将軍に就任したのは、享保元年（一七一六）のことである。元禄年間（一六八八～一七〇四）には経済が急速に発展し、農村にも貨幣経済が浸透した。商品作物の栽培、絹織物の西陣織、灘や伊丹の酒造業、有田や瀬戸の窯業などが発達し、都市も大いに繁栄した。十八世紀になると、江戸の人口は百万人になり、世界最大の都市といわれた。

享保元年（一七一六）、吉宗は享保の改革を実行し、まず米価の安定を図ろうとした。貨幣経済が浸透すると、相反するように米価は下落し、米で俸禄（ほうろく）（給与）を受けていた武士の生活が苦しくなったからである。吉宗は倹約令で消費を減速させると同時に、米を増産すべく新田開発を奨励した。そのほかにも、吉宗は有能な人材を登用する「足高（たしだか）の制」、目安箱（庶民の要望・不満などを投書させた箱）の設置を行い、政治改革を積極的に推し進めた。その結果、幕府財政は好転し、健全になったのである。

一方で、厳しい倹約は町人や百姓に不評であり、年貢の税率の固定化も不満の種となっ

た。また、享保十七年（一七三二）秋から翌年春にわたり、享保の大飢饉が発生した。その影響により、各地で困窮した百姓による打ち毀しや一揆が頻発した。とはいえ、吉宗の三十余年にわたる長期政権において、経済だけでなく、文化・芸術・学問が発達したのは事実である。

吉宗の死後、徳川家重（正徳元年／一七一一～宝暦十一年／一七六一）が九代将軍に就任した。事実上、政権運営を担ったのは田沼意次（享保四年／一七一九～天明八年／一七八八）だが、世上は不安だった。

享保の改革により、幕府財政は潤ったが、宝暦年間（一七五一～一七六四）には行き詰まりを見せた。百姓は厳しい年貢の収奪に音を上げ、耕作地を放棄すると、大都市の江戸に流入したので大きな問題となった。さらに、意次の時代には頻繁に災害があったので、たびたび飢饉に見舞われたのである。

意次は事態を収拾すべく、改革に乗り出した。意次は緊縮財政に着手し、財政規模の縮小に加え、倹約令による経費の削減を行った。また、米だけに依存するのではなく、商品の生産や

「田沼意次像」牧之原市史料館所蔵

流通に力を入れた。さらに、物価を抑制するため、株仲間（商工業者の組織）を奨励し、運上金や冥加金（営業免許・特権付与に際して納めた営業税）を課税した。こうして、それぞれの商品の販売独占権を座に与え、専売制を行ったのである。

意次の政策は幕府の役人と町人との癒着を強めることになり、賄賂政治が横行することになった。町人は運上金や冥加金を上納し、幕府の役人に取り入るようになったのである。天明二年（一七八二）から約五年にわたって天明の大飢饉が発生すると、打ち毀しや百姓一揆が頻発し、庶民生活は大いに疲弊した。その結果、意次は政治手腕を問われて失脚したのである。

田沼政治が終わり、十一代将軍の家斉（安永二年／一七七三～天保十二年／一八四一）の時代になって、寛政の改革を推し進めたのが松平定信（宝暦八年／一七五八～文政十二年／一八二九）である。定信は天明の大飢饉ですっかり農村が疲弊し、幕府財政も危機的な状況の中で、政治改革に取り組んだのである。

定信は緊縮財政を引き続き採用しつつ、農村の復興対策に力を入れた。特に、自然災害、凶作、飢饉への対策に力を入れ、万が一の事態に備えるべく、米や金銭を貯える備荒貯蓄政策を行ったのである。その結果、幕府財政は好転し、備蓄金も十分に貯えられた。その

一方、風俗統制令や倹約令を断行したので、世の中は不景気になり、町人らから不評を買ったのである。

重三郎の生きた時代は、華やかな元禄文化のあとだった。人々は慢性的な経済不況に喘ぎ、政治的には倹約令、風俗統制令で沈滞ムードが漂っていたといえよう。

江戸っ子気質

重三郎が登場する以前、上方（京都・大坂）を中心に発達したのが元禄文化である。元禄年間（一六八八～一七〇四）は徳川綱吉の時代で、貨幣経済の発達により、町人が大いに経済力を高めた。富裕になった町人は、遊興や娯楽を楽しみ、華美な生活を営むようになった。文学では井原西鶴（さいかく）や近松門左衛門、歌舞伎では大坂の坂田藤十郎や江戸の市川團十郎（だんじゅうろう）、浄瑠璃では竹本義太夫、俳諧では松尾芭蕉（ばしょう）、絵画では尾形光琳（こうりん）や菱川師宣（ひしかわもろのぶ）などが活躍し、芸術、文化、学問が発展したのである。

重三郎の活躍した天明年間（一七八一～一七八九）以降は、江戸っ子が幅を利かせた時代でもあった。では、江戸っ子気質とは、どういうものだったのだろうか。

江戸っ子は、ほかの国の者とは違って、将軍と同じ土地に住んでいるというプライドが

あった。それは、神田や日本橋に居を定めていた土着意識にも通じていた。当時の江戸は町人生活の中で形成された文化があり、しかも経済発展が著しい中で、金払いが非常に良かった。江戸っ子は「いき」と「はり」という美意識や抵抗精神があり、その表現の発露したものが芝居、そして遊郭の吉原だったのである。

「いき」とは「意気」が語源とされており、遊郭における遊びの美意識の一つとされる。それは外見としての身なりが洗練されているほか、内面的にも心意気の潔さが重視された。遊郭での遊びでも、洗練された流行の最先端をいき、同時に遊びに溺れることなく、垢抜(あかぬ)けていることが美学とされた。「はり」とは損得を考えず、ときに命を懸ける心意気のことで、主として江戸の遊女の意地のことを意味したのである。

重三郎が生きた時代は、たび重なる政治改革が行われ、まさしく混迷の時代だった。同時に、吉原での遊び方も大きく変化したのである。かつての吉原では、大名、旗本、政商が揚屋(あげや)（高級な遊女を呼んで遊ぶ店）で豪遊するなど、大いに幅を利かせていた。しかし、時代は大きく変わり、莫大な富を築いた札差(ふださし)（蔵米取りの旗本らの蔵米の受け取りや売却を代行し、手数料を得た商人）が台頭し、吉原で豪遊するようになったのである。江戸っ子は武家の支配に抵抗し、独自の文化を形成するという強い心意気を持っていた。

重三郎もまた、吉原を舞台に培われた江戸っ子気質を享受し、出版界に飛び込んでからも、その精神を貫いたと考えられる。

重三郎の関係史料

重三郎が誕生したのは、重苦しい雰囲気が漂う時代だった一方で、新しい文化が醸成された時代でもあった。成長した重三郎は暗いムードを断ち切り、出版を通して新しい世界を切り開いたのである。重三郎とは、いかなる来歴を持つ人物なのだろうか。

重三郎は名が知られた人物なので、関連する史料は多いと思ってしまうが、実際はそうではない。江戸時代の諸文献に登場するのは事実であるが、かなり乏しいのが実情である。重三郎の生涯を知るうえでの基本史料は、石川雅望（宝暦三年／一七五三～文政十三年／一八三〇）が撰した『喜多川柯理墓碣銘』、そして大田南畝の作成による重三郎の実母を顕彰した碑文が残っているにすぎない。墓碑銘とは、亡くなった人の姓名、出身地、生い立ち、人となりなどを石に刻み、墓所に立てたものである。

蔦屋重三郎墓所（東京都台東区・正法寺）

明治三十九年（一九〇六）、四葩山人なる人物が重三郎の墓を実見し、「蔦屋重三郎」（『高潮』二号）と題して寄稿した。四葩山人の記事によると、重三郎の墓碑はその養家である喜多川家の墓碑と並び、浅草（東京都台東区）の正法寺（重三郎の菩提寺）の本堂裏にあったという。墓碑の表には、重三郎の経歴が記されていたが、四葩山人はその一部しか紹介しなかった。

その後、重三郎の墓碑銘は全文が紹介されることはなく、結局、右の二つの史料は関東大震災や第二次世界大戦に伴う東京大空襲の被害で失われてしまった。ところが、のちに儒学者の原念斎（安永三年／一七七四～文政三年／一八二〇）の手になる『史氏備考』（静嘉堂文庫）の中に『喜多川柯理墓碣銘』の全文が書写されていることが判明し、重三郎の研究が進展したのである。

このように重三郎の史料は非常に乏しいが、以下、『喜多川柯理墓碣銘』などをもとにして、その生涯をたどることにしよう。

石川雅望と大田南畝

石川雅望は国学者、狂歌師、戯作者として知られ、狂名を「宿屋飯盛（やどやのめしもり）」という。雅望は、

小伝馬町三丁目（東京都中央区）に住む浮世絵師の豊信の子として誕生した。幼い頃から学問好きで、古屋昔陽から漢学を、津村淙庵から和学を習った。狂歌については、岸文笑（頭光）に教わり、のちに大田南畝の門に入った。折から狂歌が大流行しており、雅望は日本橋界隈の狂歌愛好者とともに、伯楽連を結成した。連とは、狂歌のサークルのことである。

雅望は狂歌界で頭角をあらわし、狂歌集『俳優風』、『徳和歌後万載集』、『故混馬鹿集』に作品が採用された。以後、重三郎と組んで、次々と狂歌絵本のヒットを飛ばすが、その辺りは後述することにしよう。当時の雅望は、鹿都部真顔、銭屋金埒、頭光とともに、「狂歌四天王」と称され、狂歌界での地位を確固たるものにしたのである。

寛政三年（一七九一）、雅望の家業でトラブルがあった。それは冤罪だったようだが、結局、雅望は狂歌の世界から足を洗うことになった。その後の雅望は、古典文学の研究などに打ち込み、雌伏の期間を過ごした。雅望は文化九年（一八一二）に復帰すると、大田南畝が主宰する「和文の会」に参加

四方赤良（『吾妻曲狂歌文庫』より）
東京都立図書館所蔵

して研鑽を積み、「五側」という狂歌グループを作り、熱心に活動した。亡くなったのは、文政十三年（一八三〇）のことである。

大田南畝（寛延二年／一七四九～文政六年／一八二三）は、牛込中御徒町（東京都新宿区）の御徒・大田吉左衛門正智の子として誕生した。家は下級武士の家柄で貧しかったが、幼い頃から学問に打ち込み、内山賀邸、松崎観海から国学、漢学、漢詩、狂詩などを学んだ。その費用を捻出するために、札差から借金をしたといわれている。

以降、南畝は蜀山人など多くの号を持ち、狂歌師、戯作者などとして名を馳せた。その辺りは重三郎との絡みで随所に紹介するので、ここでは省略しよう。天明六年（一七八六）に田沼意次が失脚し、そのあとに松平定信が寛政の改革を行うと、南畝は狂歌の世界から距離を置き、幕臣としての務めに注力した。

寛政六年（一七九四）、南畝は昌平黌（昌平坂学問所）の人材登用試験に好成績で合格し、支配勘定に昇進した。以後、南畝は大坂の銅座出役、長崎奉行所出役を命じられたのである。南畝は大坂に移ってから、蜀山人の号で再び狂歌を読み始め、職務に専念する傍らで、日記、紀行文、随筆を執筆した。南畝が没したのは、文政六年（一八二三）のことである。登城する途中で転倒し、その怪我が死因だったという。

重三郎の生涯

寛延三年（一七五〇）一月七日、重三郎は丸山重助の子として吉原（東京都台東区）で誕生した。母は、広瀬津与という。父は尾張国の出身で、母は江戸の出身だったが、その生涯は何もわかっていない。職業すらも不明である。重三郎に兄弟姉妹がいたのか、いなかったのかも不明である。当時、吉原は遊郭で栄えていたので、父は遊郭勤めで生計を立てていたと推測されている。

重三郎の両親の生涯にはわからないことが多いものの、母が非常に教育熱心だったといわれている。先述した南畝の碑文によると、重三郎が成功したのは、母の教育により、強い意志を持ったからだという。重三郎は、わざわざ母を顕彰した文章を南畝に依頼して作成してもらったのだから、母に対する想いは一入（ひとしお）だったと考えられよう。

重三郎が七歳になった頃、両親は何らかの理由により離別した。そこで、まだ幼少だった重三郎は、「蔦屋」という商家を営む喜多川家の養子になったという。実は、蔦屋についても、喜多川家についても不明な点が多い。重三郎は、のちに出版業で身を立てるが、喜多川家がどのような商いをしていたのか不明である。また、吉原江戸町二丁目の蔦屋利右衛門、あるいは吉原仲之町の茶屋蔦屋利兵衛が重三郎の養父ではないかといわれているが、

十分な確証がない。

喜多川家の養子となった重三郎の青春時代は、ほとんど何もわからないが、母の教えを忠実に守り、人間としても立派に成長したと推測される。石川雅望は『喜多川柯理墓碣銘』の中で、重三郎が人よりもいっそう優れた人格で、度量が大きく細かいことにはこだわらず、人に接するときは信義を重んじたと高く評価する。

重三郎と親しく交流していた雅望の言葉なので、多少は割り引く必要があるかもしれないが、のちの重三郎の成功を考慮すれば、さほど外れた評価ではないだろう。重三郎は若い頃から、実業家として成功する資質を兼ね備えた人物であり、その素質は母の教えによるものだったのである。

重三郎は天明三年（一七八三）になって、久しく離れ離れになっていた両親を日本橋通油町の新居に迎えた。親子の情愛は、強かったようである。

遊郭の源流

重三郎は書店を営み、吉原の細見を出版するようになった。吉原と重三郎との関係は、切っても切れないものがあった。十八世紀になると、遊郭としての吉原は最盛期を迎えて

いたので、その源流をたどることにしよう。

十六世紀後半に戦国時代が終焉に近づくと、遊郭は都市計画の一環として整備されていった。『多聞院日記』（奈良興福寺多門院主の日記）には、天正十六年（一五八八）には「天下の傾城、国家の費え也」と記されている。傾城とは傾城屋のことで、遊郭を意味するが、それが「国家の費え」だというのだ。

当時は豊臣秀吉の時代だったが、都市計画上、各地に傾城屋のあることが好ましくなかったと考えられる。そこには、治安の問題も大きく関わっていたに違いない。遊女をめぐっての客らとのトラブルは、現代と同様に数多く発生したと考えられる。一方で、豊臣政権が富を蓄積した傾城屋を把握しておくことは、公事銭（税の一種）の確保という財政的な側面から重視されたと考えられる。

延宝六年（一六七八）に成立した俳人の藤本箕山著『色道大鏡』（遊女評判記。性風俗の紹介をした書物）には、天正十七年（一五八九）には上・中・下三町からなる遊郭が京都の二条柳町（京都市中京区）に開かれ、洛中の傾城屋が一ヶ所に集められたと書かれている。それは、京極西、万里小路東、冷泉小路南、押小路北の方二町（京都市中京区）付近に新たに作られたものであった。

そのことを進言したのは、秀吉の配下になった原三郎左衛門である。原三郎左衛門は、島原上の町西南角の桔梗屋八右衛門の祖だった。のちに、原は島原（京都市下京区）つまり遊郭を取り仕切るようになる。

文禄二年（一五九三）には、京都所司代の前田玄以によって、遊女の揚代（遊女と遊ぶ代金）が定められた。それは遊女のランクを上・中・下の三段階とし、上は三十銭、中は二十銭、下は十銭とするものである。もしこの決まりに背けば、町中から追われることになるのだが、傾城屋の二十二名はこれに同意した。

背景には、場代をめぐる争いが問題になっていたからだと考えられる。この二年後、秀吉は京都の傾城を召し、前田利家らに与えていたことが記録されている。

発展した傾城屋

傾城屋を一ヶ所に集めると、治安統制がやりやすいのは当然のことだった。そのことを念頭において、京都の都市計画は秀吉によって進められたのである。以上の政策は、秀吉の死後も受け継がれていった。

慶長七年（一六〇二）、傾城町は六条室町西洞院（京都市下京区）に移され、二町四方の敷

地に東西に上・中・下三町の三筋の道を通した。六条三筋町とも呼ばれている。元和三年（一六一七）十一月、六条柳町の遊郭の総代（代表）は、その地域以外での営業ができなくなることを幕府から通告された。傾城町と一般の人が住む区画は、完全に分離されたのである。

六条三筋町の遊女としては、才色兼備で名高く「六条三筋町の七人衆」の一人の吉野大夫が有名である。彼女は和歌、連歌などの文芸に秀でており、琴、琵琶の演奏にも巧みであった。書道をはじめとした諸芸能を極め、のちに能書家として知られる近衛信尋らと交流した。その才色兼備ぶりは、遠く中国の明にまで伝わったという。吉野大夫は二十六歳で豪商の佐野紹益に身請けされ、妻になったのである。

傾城町はさらに移転を重ね、寛永十七年（一六四〇）には島原に移転された。一万三千坪余りといわれる広大な敷地の周囲は、一般の人から断絶すべく堀と土居が巡らされ、完全に囲い込まれた。門は一ヶ所しかなく、内部は南北に三筋の道を通し、中央に東西路を設けて、六つの町に分割されたのである。

島原は元禄年間に最盛期を迎えるが、その後、祇園（京都市東山区）や上七軒（京都市上京区）に取って代わられた。今も残る「角屋」は、日本で唯一残る揚屋建築として有名で

ある。

現在でも同じことであるが、風俗産業にはその立地に規制が設けられている。たとえば、それらが学校などの教育・文化施設の近くにあるのは、普通に考えれば好ましくないであろう。当時も同じことで、人々が住む地域から遊郭を隔離することが好ましかったと考えたのは事実である。遊郭がある地域にまとまっていれば、管理もしやすい。そのような発想は、江戸時代初期からすでにあったのである。

三大遊郭の誕生

江戸時代以降、遊郭はさらに発展していった。それは経済的な発展も意味しており、人々の可処分所得が増えた証でもある。人々は生活に追われるのではなく、余剰の資金で遊郭に通う余裕ができたのである。京都や江戸などの大都市では、堀と土居をめぐらした特定の地域を遊郭とした。

なかでも大坂新町（大阪市西区）、京都島原、江戸吉原（東京都台東区）は、日本の「三大遊郭」と称されたほどである。今でも当時の名残（なごり）がある地域も数多く存在するが、遊郭として営業し続けている所はほとんどない。以下、遊郭の進展について、戦国時代（十六世

紀後半）から江戸時代（十七世紀前半）を中心に述べることとしよう。

まず、江戸の吉原遊郭を簡単に紹介しておこう。吉原は諸書に記されているように、慶長十七年（一六一二）に庄司甚右衛門尉が幕府に嘆願し、認められたものである。もともと甚右衛門尉は北条氏に仕えていたが、天正十八年（一五九〇）の北条氏滅亡後に江戸に出て、道三河岸（東京都千代田区）で妓楼（遊女を置き、客を遊ばせる店）を営んだという。ただし、その生涯には不明な点が多い。

実際には、開業が許可されるまで時間がかかり、元和三年（一六一七）から吉原の原型となる「葭原」が開業された。甚右衛門尉自身も、西田屋という遊女屋を営むことになったが、幕府当局では開業の許可に慎重だった感がある。

幕府は遊郭の開業に際して、ルールを徹底した。たとえば、客の連泊を認めない、虚偽の説明を受けて連れて来られた娘は、調査して親元に返すこと、犯罪者は届け出ること、などの規則が課せられた。その後、さらに江戸市中に遊女屋を置かないこと、江戸市中に遊女を派遣しない、服装を華美にしない、などの決まりが追加で決められた。未然にトラブルを防ぐためであろう。

江戸幕府は、遊女屋を公的に認めて冥加金を徴収することが目的だったが、一方で治安

などの問題があり、遊郭の営業に厳しい条件を課したと考えられる。

遊郭にとっても、この条件を飲むことにより公的に認められ、市場を独占できるのだから決して悪い話ではない。ただし、のちにはこうした規則も反故にされ、違法なこともたびたび行われたのである。

地方に波及した遊郭

次に、地方の事例を取り上げておこう。江戸時代に至ると、各地に遊郭が設けられ、かなりの数が営業を認められた。それは経済発展や城下町の形成等による都市の発達と、決して無縁ではないであろう。

先述した藤本箕山の『色道大鑑』には、当時の遊郭の二十五ヵ所が次のとおり列挙されている。

京島原（京都市下京区）、伏見夷（えびす）〔撞木町（しゅもくまち）〕、伏見柳町（以上、京都市伏見区）、大津馬場町（滋賀県大津市）、駿河府中（静岡市葵区）、江戸三谷（さんや）〔吉原〕（東京都台東区）、敦賀六軒町（福井県敦賀市）、三国松下（福井県坂井市）、奈良鳴川木辻（奈良市）、大和

小綱新屋敷（奈良県橿原市）、堺北高洲町、堺南津守（以上、大阪府堺市）、大坂瓢簞（ひょうたん）町〔新町〕（大阪市西区）、兵庫磯町（神戸市兵庫区）、佐渡鮎川山崎町（新潟県佐渡市）、石見温泉津稲荷町（島根県大田市）、播磨室小野町（兵庫県たつの市）、備後鞆有磯町（広島県福山市）、広島多々海（ただみ）（広島県竹原市）、宮島新町（広島県廿日市市）、下関稲荷町（山口県下関市）、博多柳町（福岡市博多区）、長崎丸山町寄合町、肥前樺島（以上、長崎市）、薩摩山鹿野田町（やまがのたまち）（鹿児島県霧島市）

このなかでも、長崎の丸山は唐人客向けの遊郭として異彩を放っており、先の三大遊郭と並ぶ存在であった。当時、外国からの窓口は、長崎に限定されていたので、国際色豊かな遊郭として知られた。丸山遊郭の成立は寛永十九年（一六四二）とされ、市中の遊郭が一ヶ所に集められたといわれている。

もちろん、その他の地域でも、遊郭が形成されていた。次に、比較的早い段階のものを見ておきたい。秋田藩佐竹家の家臣梅津政景（うめづまさかげ）の日記『梅津政景日記』には、いくつかの事例が挙げられている。

江戸初期における秋田の院内銀山（いんないぎんざん）（秋田県湯沢市）には、傾城町が成立していた。傾城町

には院内銀山の傾城役を請け負っていた美濃之二郎兵衛がおり、「傾城のてい（亭）主」と呼ばれていた。傾城町には肝煎（きもいり）が置かれ、炭館弥介がその役に就いていた。肝煎とは、遊女を斡旋する世話役と捉えてよいであろう。

このように遊郭では、肝煎を任された者が遊郭の統括・経営を行っていたのである。もちろん、遊郭が急に成立したわけではない。おそらく自然発生的に生まれたものが、やがて公に認められることになったと考えられる。

同様に『梅津政景日記』を紐解（ひもと）くと、長崎で傾城の売買があった記事を確認することができる。質物（この場合は、貸金の担保に子女を差し出させて働かせる奉公契約）に置かれた傾城八屋の例のように、女性が人身売買や質入の対象であったことが判明する。江戸時代になると、借金の形（かた）として娘が遊郭に売られることがあった。長崎における事例は、のちに丸山に引き継がれた遊郭形成の側面を示しているように感じる。

このように、戦国時代を通して各地に存在した遊郭は、江戸時代になって整理・統合され、特定の場所に集められたことがわかる。かつては自由であった遊女の商売も、戦国時代を通して管理の対象になり、江戸時代にはその制度化がいっそう進められたのである。

吉原細見とは

安永二年（一七七三）、重三郎は書店を開業し、吉原細見の改め、卸や販売を行った。「改め」という仕事は、遊郭内の情報（遊女の異動など）を収集し、最新のデータを提供するものだった。書店の場所は、吉原大門口五十間道の向かって左側である。重三郎が販売していた吉原細見は、毎年正月と七月の年に二回、鱗形屋（うろこがたや）が刊行していた。

吉原細見が刊行される前、ガイドブック的な役割を果たしたのが遊女評判記だった。遊女評判記とは、三大遊郭の京都島原、江戸吉原、大坂新町の遊女名を列挙するだけでなく、彼女たちの容姿などを詳しく論評したものである。承応四年（一六五五）に刊行された『桃源集』は現存する最古の遊女評判記で、先述した藤本箕山も『まさりぐさ』という大坂新町の遊女を紹介した本を刊行した。吉原の遊女評判記の最初の作品は、万治三年（一六六〇）に刊行された『高屏風くだ物がたり』である。

吉原細見は細見絵図（細見図）とも称され、吉原遊郭を案内するパンフレットのようなものだった。それは、一枚ものの絵図になっており、遊郭の抱える遊女の名前、位付（くらいづけ）（遊女の等級）、遊女の抱え主、揚屋（高級な遊女を呼び遊興する店）、茶屋（遊女屋などに案内する）、船宿（船で吉原に通う客の送迎をする）、揚代（遊女と遊ぶ代金）、紋日（もんび）などを詳しく紹介して

いた。紋日とは遊郭の特別な日であり、遊女はその日に必ず客を取らなくてはならなかった。

吉原細見のもっとも古いものは、貞享五年（一六八八）の『吉原細見図』といわれている。ただし、現存するのは元禄二年（一六八九）に刊行された『絵入大画図』（『吉原大絵図』）である。享保年間（一七一六～一七三六）になると、これまでの絵図から横本の冊子体へと体裁が変わった（のちに縦長本になった）。吉原細見は年に一回は刊行され、幕末維新期まで続いたのである。

享保年間の中期以降、吉原細見の出版は最盛期を迎え、続々と刊行する版元が増えた。鱗形屋孫兵衛、山本左衛門などはその代表である。ところが、元文三年（一七三八）以降、多くの版元は吉原細見の刊行から手を引いていった。その背景には、重三郎の存在があったのである。

版元になった重三郎

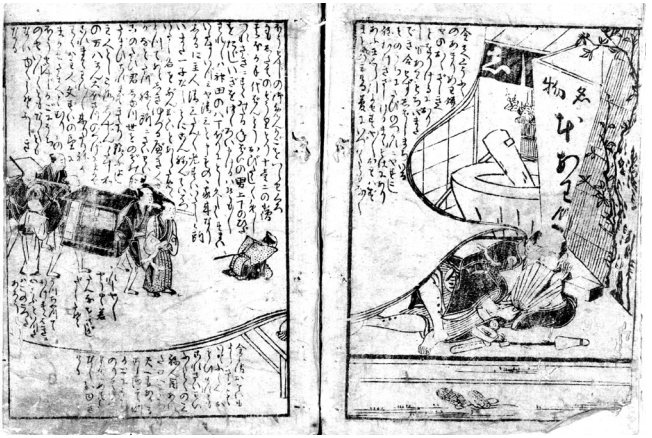
当初、重三郎が経営した本屋は、縁者である蔦屋次郎兵衛の茶屋の軒先を借りて営んでいたという。いかに本を商うとはいえ、吉原細見のほかに豊富な品揃えで勝負するのは難しかった。そこで、吉原細見を商う以前の重三郎は、吉原で貸本も取り扱っていたのでは

ないかと推測されている。

重三郎が鱗形屋の吉原細見を取り扱うに際しては、先述のとおり「改め」も手がけていた。重三郎は吉原に書店を構えていたので、その類稀なる情報収集能力を買われ、業務として受けたと考えられる。

鱗形屋は万治年間（一六五八～一六六一）に創業した江戸を代表する老舗（しにせ）の版元だった。それまで、京都の版元が出版界で幅を利かせており、江戸の版元はまだまだ力が足りなかった。慶長八年（一六〇三）に幕府が江戸に成立し、経済的に急速に発展すると、江戸の版元も京都の版元に対抗しうる勢力となった。

江戸幕府の成立後から、江戸と京都の版元は、しのぎを削ることになった。やがて、政治経済において、江戸のウエイトが大きくなると、出版界においても江戸の比重が大きくなっていった。宝暦年間になると、江戸で刊



『金々先生栄花夢』 国立国会図書館所蔵

行された出版物の点数は、ついに京都や大坂を上回ったのである。

安永二年（一七七三）、重三郎は浮世絵師の勝川春章の手になる吉原細見『這婢観玉盤』を売り出し、その翌年には発明家の平賀源内（福内鬼外。享保十三年／一七二八～安永八年／一七七九）の序文がある『細見嗚呼御江戸』を販売した。その後、重三郎は出版界の情勢に乗じて、自らも版元に転身した。安永三年（一七七四）、重三郎は浮世絵界の重鎮の北尾重政が口絵を描いた遊女評判記『一目千本』を刊行したのである。その翌年には、『急戯花之名寄』も出版した。その際、重三郎には鱗形屋の支援があったのではないかと推測されている。

重三郎が平賀源内から『細見嗚呼御江戸』の序文を寄せられたことは、誠に興味深いところである。源内といえば、博物学者として知られているが、戯作者、浄瑠璃作家としての一面もあった。小説『根南志具佐』、『風流志道軒伝』、浄瑠璃『神霊矢口渡』などは、その代表作である。源内は大変な奇才といわれていたので、そこから受けた影響は大きかったに違いない。

安永八年（一七七九）十一月、源内は誤って人を殺傷してしまい、その罪によって入牢した。源内は大名屋敷の修理を請け負っていたが、酒に酔った際に修理の計画書を二人の大

工に盗まれたと勘違いし、凶行に及んだのである。その一ヶ月後、源内は失意のうちに獄中で死を迎えた。もし、源内が亡くなっていなければ、重三郎の生涯が少しは変わっていたかもしれない。

重三郎は、医師の杉田玄白（げんぱく）とも交流があった。重三郎の周りには、多くの優れた人物がいたことを忘れてはならず、その人脈が出版界における成功のカギを握っていたのである。

版元としての処女作

鱗形屋のサポートだけでは、重三郎は成功しなかったかもしれない。遊女評判記は吉原の宣伝にもなったので、吉原で実力を持つ者の助力を得て、遊女らから出資金を募集し、制作・刊行が可能になったともいわれている。自身の資金で刊行するとリスクもあるが、出資金が元手であれば、決して損はしない。重三郎は吉原の宣伝・広告を掲げ、吉原という地縁を頼りにして、出版活動を行ったのである。重三郎には、遊女評判記の刊行を成功させる才覚があった。

安永五年（一七七六）の俳諧絵本『青楼美人合姿鏡（せいろうびじんあわせすがたかがみ）』は、北尾重政、勝川春章が絵を描き、山崎金兵衛との合板（共同出版）で刊行されたものである。この作品はかなりの経費を

掛けており、贅を尽くした豪華な造本になっていた。山崎金兵衛は、浮世絵師の鈴木春信の絵本を数多く刊行した地本問屋である。同書は重三郎が企画立案と北尾重政、勝川春章への仕事の依頼を担当し、山崎金兵衛が資金を供出したという。重三郎の合板はほかにもあるので、似たような方式で刊行された可能性もあろう。

十八世紀初頭、江戸の版元は刊行する書物の性格によって、書物問屋と地本問屋に大別された。書物問屋は、現代でいうところの学術書を刊行していた。たとえば、儒学書、仏教書、歴史書、医学書、辞書などの硬い内容の本である。

一方、地本問屋は、そもそも江戸で刊行された書物を意味するが、そのジャンルは草双紙（赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻）など絵入りの娯楽性に富んだ本だった。洒落本（遊郭をテーマとした本）、読本、錦絵、浮世絵、一枚摺、咄本（笑話や小咄の本）、長唄本、道中すごろくなども、地本問屋が扱っていた。むろん、重三郎は地本問屋である。

安永四年（一七七五）、ついに重三郎は最初の吉原細見『籬の花』を刊行した。それまで鱗形屋が刊行する吉原細見を販売していたが、ついに細見の版元としてのデビューを果たしたのである。

版元になった裏事情

重三郎が吉原細見の版元になったのには、もちろん理由があった。それは、世話になっていた鱗形屋の大失態にあった。

安永四年（一七七五）、鱗形屋は恋川春町（延享元年／一七七四～寛政元年／一七八九）の手になる『金々先生栄花夢』を刊行し、これが大ベストセラーになった。恋川春町は戯作者、浮世絵師として知られ、『金々先生栄花夢』の刊行により、「黄表紙の祖」といわれた人物である。それは単に春町の力だけで成功したのではなく、企画、販売、宣伝の面において、鱗形屋が際立った能力を発揮したからだろう。

黄表紙は大人向けの絵が添えられた読み物で、表紙が黄色だったので、そのように呼ばれた。『金々先生栄花夢』は、中国の「邯鄲の夢」の故事を下敷きにした作品である。それまでの赤本、黒本、青本（以上も表紙の色でそう呼ばれていた）の類は、絵解きが中心であり、内容も伝承、軍記物語、怪談などを素材とした幼稚な内容だったので、あまり文学的なおもしろさがなかった。

黄表紙は内容に通と滑稽を交えつつ、挿絵を効果的に用いたので、人々はそのおもしろさに飛びついたのである。同書の大ヒットに気を良くした鱗形屋は、春町の作品を次々と

刊行した。安永六年（一七七七）になると、黄表紙作家の朋誠堂喜三二（平沢常富。享保二十年／一七三五～文化十年／一八一三）を執筆者に迎え、たちまちヒットを飛ばした。平沢常富は秋田藩の定府藩士で江戸留守居を務め、若い頃から「宝暦の色男」と称し、吉原通いを続けた人物である。

黄表紙の出現により、赤本、黒本、青本の類は出版市場から姿を消した。鱗形屋は黄表紙の刊行で隆盛を極めたが、図らずも不幸が訪れたのである。

安永四年（一七七五）、鱗形屋の手代（奉公人）の徳兵衛は、大坂の版元の柏原与左衛門、村上伊兵衛が刊行した『早引節用集』（『節用集』は室町時代後期の国語辞書）を『新増節用集』と改題し、無断で刊行した。当時、著作権という言葉はなかったが、道義にもとる行為が大問題となり、罰せられることになったのである。

徳兵衛は家財を没収のうえ、十里四方追放という厳罰に処された。また、鱗形屋を経営していた孫兵衛も監督責任を問われ、二十貫文の罰金を払う羽目になったのである。鱗形屋にとっては罰金よりも、無断で作品を刊行したことで、すっかり信用を失ったことのほうが痛かった。その後、鱗形屋は黄表紙の出版攻勢で勢いを盛り返そうとしたが、安永九年（一七八〇）には一点も刊行できないという凋落ぶりを見せたのである。

出版点数を伸ばす

重三郎が吉原細見を出版し、その後もさらに出版点数を増やしたのは、鱗形屋が無断での出版により没落したことが大きなきっかけだった。危機に陥った鱗形屋は吉原細見を刊行する余裕がなくなったので、重三郎はそれまでのノウハウを生かし、自ら吉原細見『籬の花』の出版に踏み切ったと考えられる。

安永五年（一七七六）になると、吉原細見は蔦屋と鱗形屋から刊行され、それは安永の末年頃まで継続した。しかし、鱗形屋の吉原細見は劣勢となり、天明三年（一七八三）以降になると、蔦屋が独占的に吉原細見を刊行するようになったのである。蔦屋が吉原細見の出版を独占したのは、鱗形屋の大失態だけでなく、吉原を知り尽くした重三郎の情報網にあったのではないか。重三郎は鱗形屋のもとで「改め」を行い、遊女らの情報収集のノウハウをすでに持っていたので、さほど苦労はなかったはずである。

同時に、細見の刊行に際しては、工夫がなされていた。それまでの吉原細見は、一五・七cm×一一cmという大きさだったが、見やすくするためか、一九cm×一三cmにやや大型化を

朱良管江（『吾妻曲狂歌文庫』より）
東京都立図書館所蔵

図った。蔦屋の吉原細見は上下に遊女の情報を掲載したので、必然的に丁数（頁数）が節約できた。その結果、蔦屋の吉原細見は一冊あたりの刷る枚数が減り、紙代などの経費を抑えられたので、鱗形屋より安く販売できた。そのような工夫があったので、蔦屋の吉原細見は大きなシェアを獲得できたのだろう。

天明三年（一七八三）に刊行された吉原細見『五葉松』は、重三郎にとって記念碑的な作品になった。序文は朋誠堂喜三二（平沢常富）が執筆し、巻末には四方赤良（大田南畝のペンネーム）の跋文（あとがき）に加え、朱楽菅江の祝言狂歌を載せた。朱楽菅江は狂歌三大家（大田南畝、唐衣橘洲）の一人で、天明狂歌ブームを築いた人物である。同書には、当時のオールスター作家が参画したということになろう。

安永三年（一七七四）以降、重三郎は遊女評判記の『一目千本』を皮切りにして、吉原細見、俳諧絵本、読本、洒落本、絵本、評判記を続々と刊行した。しかも、関係した序文などの執筆者、挿絵の浮世絵師は、先述した錚々たる面々である。重三郎は、いかにして彼らを起用し得るだけの人脈を築いたのだろうか。

当時、吉原は遊郭としてだけではなく、社交場としての機能を持っていたので、文士（文筆家）や絵師などの名士も訪れていた。重三郎は吉原に店を構えていたのだから、彼らが

立ち寄った可能性は大いにあろう。そこでは、単に日常会話だけではなく、吉原細見などの仕事の話題が持ち上がったに違いない。こうして重三郎は、当時の名だたる文士らと交流を深め、仕事の依頼を行った可能性がある。

凋落した鱗形屋

蔦屋が台頭したのは、先にも触れたように鱗形屋がほかの版元が刊行した書籍を無断で改題のうえ販売し、処罰されたからだった。鱗形屋はすっかり信用を失い、徐々に出版の点数を減らしていった。刊行点数が減っていったのだから、経営も厳しくなっていくのは当然のことだった。ところが、蔦屋の出版点数も徐々に減っていった。

安永七年（一七七八）一月、蔦屋は吉原細見を刊行したが、この年の出版はこれ一点だけに止まった。翌年は吉原細見を一点、咄本を二点刊行しただけで、勢いを徐々に失ったのである。蔦屋の刊行点数が減ったという事実は、鱗形屋の衰退と関係しているのか否かは不明である。安永十年（一七八一）になると、鱗形屋の経営にとどめを刺すような出来事があった。

同年、大田南畝は絵草紙評判記『菊寿草』の中で、鱗形屋に起こった事件を書き記して

いる。それ以外には、事件の顚末を物語る史料はない。次に、同書に記された事件の顚末を挙げておこう。

鱗形屋には大名や旗本の出入りが多かったが、ある家の使用人が遊興費を捻出するため、主家の重宝を無断で質入れして換金した。その仲介を行ったのが鱗形屋である。ことが露見すると、鱗形屋を経営していた孫兵衛は江戸から一時的に追放されることになり、責任を免れることができなかった。この事件が決定打となり、鱗形屋は事実上の経営破綻を迎えたのである。なぜ、鱗形屋が使用人の片棒を担ぐような真似をした理由は不明である。

通常、毎年一月に黄表紙は刊行されたので、前年から準備が必要だった。それは原稿の準備だけでなく、編集、印刷に至るスケジュールも含む。鱗形屋は安永九年（一七八〇）には一点も刊行できない状況になっていたが、その前年には刊行点数が激減していた。少なくとも安永七年（一七七八）には、鱗形屋の経営を圧迫するような事態が何かあったと考えられる。苦境に陥った鱗形屋は、事態を打開するため、先述した事件に関与してしまったのだろう。

鱗形屋の凋落と同じ頃、蔦屋もまた苦境に喘いでいたが、安永九年（一七八〇）になると刊行点数がV字回復したのである。

復活した蔦屋

安永九年（一七八〇）になると、蔦屋の刊行点数は激増し、書籍を十五点も刊行した。それまでは合計して二十点ほどしか出版していなかったのだから、まったく驚くしかない。その内訳を確認すると、多い順から黄表紙が八点、吉原細見が二点、咄本が二点、往来物（初歩的な教育のテキスト）が二点、洒落本が一点である。

『伊達模様　見立蓬萊』の巻末には、重三郎の強い意気込みを感じる新版の広告が掲載された。そこに添えられた絵は、芝居の舞台をあしらったもので、重三郎が幕引き役で登場するというユニークなもの。注目されるのは、黄表紙を八点も刊行したことで、そのうち、四点を執筆したのは朋誠堂喜三二である。

朋誠堂喜三二は先述のとおり、秋田藩の定府藩士で江戸留守居を務めていた。役目として吉原での接待は欠かせなかったので、通い詰めていたのだろう。朋誠堂喜三二というペンネームには、「干せど気散じ」という意が込められていた。江戸に生まれた喜三二は、幼い頃から芝居を好み、乱舞、鼓を習っていた。俳号月成、狂名に手柄岡持を用いるなど、非常に文才の豊かな人物だった。恋川春町とともに、黄表紙の発展に貢献し、数多くの著作を残したのである。

鱗形屋が傾いていくと、喜三二や春町の活躍の場が失われた。当時、黄表紙を刊行する版元はほかにもあったので、二人にオファーがあったに違いない。たとえば、鱗形屋のライバルの版元としては、鶴屋喜右衛門がいた。鶴屋喜右衛門は京都の書物問屋だったが、のちに江戸に進出し、手広いジャンルの本を刊行した。喜三二の著作も一点刊行したのだから、互いに知らない仲ではなかったはずである。当時の蔦屋はむしろ弱小で、まだ鶴屋喜右衛門の足元にも及ばなかった。

このように喜三二の激しい争奪戦が展開されたと思われるが、最終的に勝利したのは重三郎だった。それには、いくつかの理由が考えられる。

重三郎は吉原に本拠を置き、鱗形屋のもとで吉原細見の販売を扱い、やがて版元として独立した。いかに弱小とはいえ、十分なノウハウを蓄積していたので、大手に匹敵するほどの可能性を秘めていたに違いない。また、喜三二らの作家に加え、北尾重政、勝川春章らと仕事を通じて、厚い信頼関係を築いていた。商才たくましかった重三郎のことだから、いち早く彼らに協力を要請したことだろう。

こうして、まだ三十一歳だった重三郎は、喜三二らの人気作家を囲い込むことで、その後の発展を確実なものにしたのである。

コラム❶　吉原と遊女のことなど

遊女と遊ぶ相場

重三郎は吉原を舞台にして、出版業で成功するきっかけをつかんだ。ここでは、吉原を含む遊女について述べることにしよう。

江戸の吉原（東京都台東区）で人気がある遊女は、「呼出し昼三（ちゅうさん）」と称された。揚代（あげだい）（遊女や芸者を呼んで遊ぶときの代金）が昼夜で三分（約十万円）だったので、そのように称されたという。太夫と称される最高ランクの揚代は、一両一分だったといわれている。この金額を現代の貨幣価値に換算すると、十五万円程度になるから、かなりの高額だったのは明らかだ。

吉原との比較のために、低価格の夜鷹の例を挙げておこう。夜鷹とは非公認の私娼のことで、夜になって道端で客引きをし、仮小屋または茣蓙（ござ）の上で情交した。その揚代は、二十四文（三百〜四百円）という激安ぶりだった。夜なので遊女の顔が見えず、高齢の女性が

交じることも珍しくなかった。

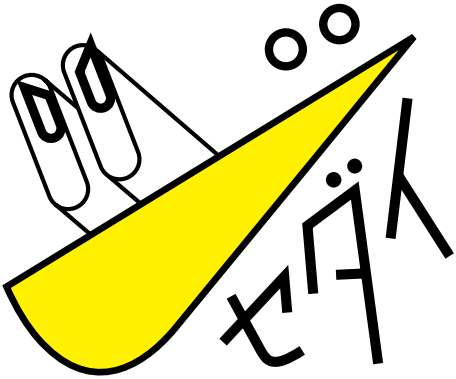
夜鷹が出没するのは本所吉田町（東京都墨田区）で、客は武家・商家の下級奉公人や下層労働者だった。吉原で遊べない貧しい者は、夜鷹を買っていたのである。夜鷹狩りという取締りは、しばしば行われたという。

江戸の吉原で、もっとも格式の高い遊女屋が大見世（大籬見世、総籬）である。大見世は高いランクの遊女を抱えており、張見世（後述）をせずに客を募った。見世の内部は上り口の格子（籬）がすべて天井まで達しており、間口、奥行はもっとも大きかった。

中見世は上り口の格子の高さが大籬の二分の一から四分の三ぐらいで、小見世は格子の高さが大籬二分の一以下だった。張見世は遊女屋の入口脇に設けられた部屋で、遊女が盛装して並び、客から声が掛かるのを待つものである。いずれもテレビの時代劇や映画でお馴染みの場面である。

吉原初期では、遊女のランクによって揚代が決まっていた。大見世の遊女の目安は、次のとおりである。

- 太夫（一両一分＝約十五万円）
- 格子太夫（三分＝約十万円）



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!